

大島紬絣文様集割込柄の発刊

企画支援部 ○徳永嘉美

1. はじめに

大島紬の絣文様は、世界に類を見ない精緻で独特なもので、その絣から生み出される文様は地域の文化であり、先人から受け継がれてきた歴史的な遺産でもある。当センターでは、これらの絣文様を調査研究復元し体系化を行っており、これまで絣文様集として、小柄（伝統柄）、小柄（無銘柄）、そして小中柄（飛び柄）を刊行してきた。本年度は先に発刊した小中柄（地詰柄）に引き続き、割込柄を復元し、大島紬絣文様集Vol.05割込柄として発刊した。

2. 研究概要及び結果

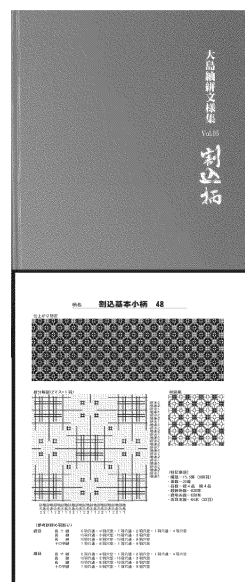
2.1 大島紬絣文様割込柄

小柄・小中柄を母体としてデザイン展開した割込柄は、その発祥の正確な時期、地域、作者は定かでないが、小中柄が盛んに織られていた大島紬生産地である奄美大島北部の笠利、龍郷地区を中心として発展したものと思われる。図柄調査収集の経緯から、鹿児島地区にも多くが残されており当時の活性化がうかがえる。

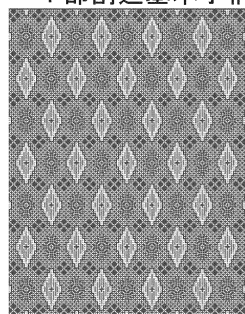
割込柄はその名の通り、通常の絣配列である絣糸2本（1元絣）の繰り返しに変化を加えて、絣糸1本（カマス絣）を割込ませたものである。従って、絣糸は2本と1本、そして同じように地糸においても2本と1本の繰り返しとすることで、柄に造形的な深みをもたせ絶妙に絣表現された造形美を生みだし秀逸なデザインが創作された。時代背景は大正末期頃から昭和中期まで盛んに造られ、その人気の高さから他産地の模倣に合い、特に線絣を得意とする村山大島紬が主にその対象とした。これを機に、昭和28年から総蚊絣方式へ大転換することになり現在に至っている。その後割込柄は急速に廃れることになるが、古典をイメージする大島紬として現在でも一部製造が続けられている。

割込柄は小柄が基本ツールでありその集合体で柄が構成され、幾何学柄から出発しやがて自由曲線による中柄・大柄へとデザイン展開され、後の総蚊絣方式の大和絵に影響を与えることになり、そこには先人の多大な努力による造形美が見出せる。この割込柄は、龍郷柄と同様に他産地では全く見られない独特な文様であり、後世に残すべく貴重な資料であると考え、全2巻で編纂することとした。1巻目は割込基本小柄と小中柄そして2巻目は割込小中柄・中柄・大柄を網羅する。名前が残されていないのでコンテンツとして、1巻目1部は割込基本小柄で、前集の小柄集同様に柄が小さく再現が難しいので織組織の分解図を含めたもの、2部は小中柄で仕上がり想定のみでそれぞれ図録した。

刊行した絣文様集と内容の一部を図1に示す。



1部割込基本小柄



2部割込小中柄

図1 大島紬絣文様集
(割込柄)

2.2 コンピュータによる仕上がり想定

本集は2部構成となっており、1部は割込小柄でイラストレータによる織組織の分解図から正確な仕上がりを想定する手法、2部は割込小中柄で大島紬専用CAD（MS-DOS版・Windows版）で仕上がりを想定する手法を用いた。

2.3 コンテンツ

割込柄は上述のとおり個別に名称が残されていないので、図柄表現のツールである割込基本小柄と割込小中柄の2種類に分けて243柄を図録した。仕上がり想定の一部を図2に示す。

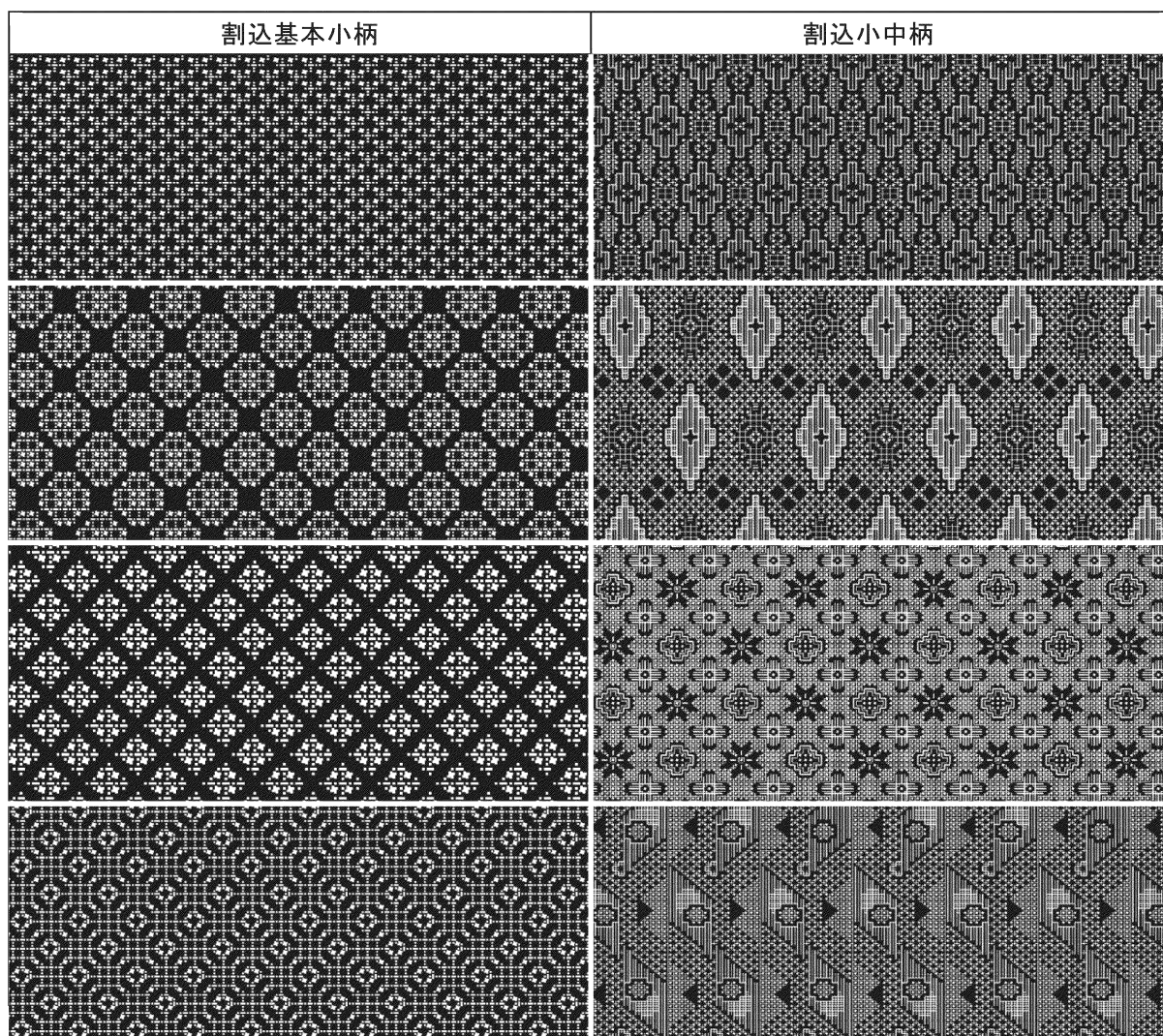


図2 主な仕上がり想定

3. おわりに

割込柄は大島紬緋文様の中で最も古典をイメージするにふさわしい文様であり、緋表現のツールである太い線と細い線とのコンビネーションでデザインに深みを持たせ重厚さを醸し出している。そこには先人の多大なエネルギーの集約があり、創造力の逞しさを感じることができる。このデザインは和装に留まらず、洋装・インテリアなど多方面に渡って今後応用展開の可能性があると付しておきたい。本緋文様集作成に当たって、平成25年度の緊急雇用創作事業で実施した関係者の皆さんに、多大な協力を得たことに謝意を表す。